

東島根中学校長雑感

足立区立東島根中学校

令和8年6月29日 令和8年度 第5号

15の試練 ～君たちは、決して一人ではない～

校長 大瀧 訓久

小学校の低学年からメガネをかけ、愛読書は「コロコロコミック」。運動音痴の私の次男は、中学入学と同時に「水泳部」に入部した。小学校時代は鼓笛隊でトロンボーンを吹いていたので、両親共に中学校では吹奏楽部に入っていた。本人は、兄がソフトテニス部に入っていたので、中学校の部活は運動部に入らなければいけないと勝手に思い込んだらしい。さて、自分には何の運動ができるか。幼い頃に兄と一緒にスイミングスクールに少しだけ通っていたことを思い出し、球技はまったくできないが、水泳ならできだろうと軽い気持ちで入部届を提出した。ところが水泳部に入ってビックリ。顧問の数学科の教員は大学まで水泳の名選手、スイミングスクールでのコーチ経験もあるバリバリの顧問であった。スイミングスクールに通っていなくても、学校の部活動で全国大会に出場するという夢を持っていた。何と、5月の初めから9月下旬まで学校の屋外プールで練習。校庭や体育館と違いプールは水泳部が使い放題。毎日、練習である。大会に出場すると息子の学校の生徒たちの日焼けした黒い体が妙に目立った。冬場は近くの温水プールを借りての練習と筋トレ。へたなスイミングスクール顔負けのハードな練習であった。といっても、都大会での上位はスイミングスクールに通う有名選手たち。息子と同年の渡部香生子選手は怪物のような泳ぎをしていた。しかし、さすがの運動音痴の息子も、平日は平均2時間で5000m、休日は一日18000mを毎日泳がされれば自然とタイムは上がってくる。下級生にスイミングスクールの選手経験者も加わり、徐々に都大会で上位を狙えるチームになってきた。身長も急激に伸びた息子は、ついにリレーのメンバーに選ばれた。息子中3最後の夏の都大会。この都大会で全国大会の標準タイムを超えると全国大会に出場することができる。息子たちの400mメドレーリレーのチームは、全員がベストを出して標準タイムに届くかどうかである。メドレーリレーは、第一泳者は背泳ぎ、第二泳者は平泳ぎ、第三泳者はバタフライ、第四泳者は自由形である。不器用な息子は最終の自由形。全員が最後の力を振り絞って泳ぐ、最終の息子が「任せろ！」と勢いよく飛び込む。チームは「行け、大瀧！」の大合唱である。そして、自己ベストタイムを出して息子がゴールする。何と、標準タイムよりも2秒以上速いタイムであった。「やった！」「全国だ！」プールから上がった息子を中心に4人が満面の笑みで飛び跳ねている。その時、場内にアナウンスが入る。「第〇コース、△△中学校、第三泳者と第四泳者の引き継ぎ違反により失格」。息子の△△中学校は失格。第四泳者、息子のフライングである。リレーの引き継ぎは、飛び込み方による若干の誤差もあるため、機械計測でタッチから飛び込むまでの時間が-0.03秒までは認められている。顧問が本部に確認しに行くと息子は-0.05秒フライングしていた。その差0.02秒。泣き崩れている息子の姿を見ながら、その時親は何もできなかった。ただ周りの人たちに頭を下げて謝るだけであった。その晩、いつも食欲旺盛な息子は初めて夕食を食べなかった。スポーツは素晴らしい。速い選手は美しい、強い選手はカッコいい。ただし、スポーツは残酷でもある。「神は乗り越えられない試練は与えない」とマザー・テレサはいう。この息子が15歳で与えられた試練は何を意味するのであろうか。中学卒業後、息子は高校でも意地で水泳を続け、水泳部の部長として部員をまとめた。大学では水泳から離れ、現在社会人8年目、先月末に30歳になった。毎日遅くまで働き、休日はボーイスカウトの活動をしている。

今でも、プールサイドで標準タイムを切って満面の笑みで4人が飛び跳ねている姿と失格が分かり一人泣き崩れている息子の姿がはっきりと脳裏に映る。失格から15年、未だにこの試練が何を意味しているのか私にはよく分からない。けれども、私自身で言えば、息子が15歳でうけた試練と比べると、大人の私が直面する全ての困難が小さく見え、どんな試練にも立ち向かえる「力」をもらえたように感じる。

君たちに知っておいてもらいたいことがある。

君たちが喜ぶと、その2倍喜んでくれる人がいることを、

君たちが悔しがると、その3倍悔しがってくれる人がいることを、

君たちが悩むと、その5倍悩んでくれる人がいることを、

そして、その人たちは、最後まで君たちを見守り、応援してくれていることを。

誰でも伸びる！

今から50年近くも前の昭和の時代の話です。私の父の友人がある小学校のPTA会長をしていました。PTA主催の講演会でその当時テレビやラジオで活躍していた人気教育評論家（今で言えば「尾木ママ」的な人）に来てもらうことになり、せっかく有名な評論家が来てくれるので、高学年の児童も一緒に話を聞くことになりました。講演後の質疑応答の時、ある保護者が「この中で将来、伸びる子はどの子ですか？」と変な質問をしました。評論家は一瞬躊躇しましたが、笑顔で児童たちが座っている場所に出向き、複数の児童の肩をたたいて将来伸びる子を指名しました。周りにいた保護者や教員から見て「なるほど」「やっぱり」という子もいましたが、「えっ、この子が」という子も何人か含まれていました。控え室で会長が評論家に指名した理由を聞くと「私は占い師ではありません。全てあてずっぽうですよ。」ということでした。しかし、その後、このときに指名された全ての児童が優秀な成績で小学校を卒業したそうです。父と会長の会話は「不思議だよねえ〜」で終わってしまいましたが、今考えると、有名な評論家に肩をたたかれた児童は「私は、やればできるんだ!」と自信を持ち、その児童の保護者や担任の教師は「我が子（児童）の良さを見落としていた、しっかりと伸ばさなきゃ」と自覚と責任を強く感じたのだと思います。つまり、子ども本人が自分に対して「自信」をもち、保護者と教員が「自覚」と「責任」をもって養育・教育していけば『どの子も伸びる』ということなのでしょう。子どもは可能性のかたまりなのです。

今後の予定

- 7月 1日（水） 小中連携研修（授業・平野小）
- 7日（火） 開かれた学校づくり協議会（役員会 18:30～、全体会 19:00～）
- 8日（水） 2年：職場体験始、区中研・給食あり
- 10日（金） 2年：職場体験終、1年：魚沼自然教室保護者会
- 15日（水） 避難訓練
- 16日（木） 大掃除
- 17日（金） 全校集会
- 21日（火） 夏季休業日始、サマースクール1日目、三者面談始
- 27日（月） サマースクール5日目、三者面談終
- 29日（水）～31日（金） 中一勉強合宿
- 8月28日（金） 学年登校日、サマースクール6日目
- 9月 1日（火） 全校集会、避難訓練、引き取り訓練
- 3日（木） 専門委員会（前期最終）
- 4日（金） 3年：実力テスト
- 10日（木） 前期期末考査（英・理・社・音）〈給食なし〉
- 11日（金） 前期期末考査（技家・数・国・保体）給食あり
- 15日（火）～17日（木） 3年：修学旅行 28日（月）～30日（水） 1年：魚沼